

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

ジグソーパズル

北辰中学校三年

大石 綾乃

受賞の言葉

ジグソーパズルのピース一つ一つにも気持があるのではないかと思い、想像して、この物語を書きました。このような賞を戴けて、とてもうれしいです。ジグソーパズルのピースたちのように、助け合う気持を忘れずに行動していきたいです。

僕はジグソーパズル。四百個のピースの上から五列目の左から三番目だ。おもちゃ屋さんで購入され、アパートの大家さんの部屋で組み立てられている。

はめこまれる順番は、角のピースから。その次に縁の七十六個のピース達だと、だいたい決まっている。どうせ真ん中がはめこまれるのは最後らへんで、あまり絵が描かれてない、ただの背景の僕はほぼ一番最後。いなくなっても支障はでないだろうな。意外と壁にかけられると、落ちないように耐えるのは大変らしい。まあ、頑張ろう。

完成して壁に掛けられた僕たちは、しばらくそのまま飾られていた。半年くらい過ぎただろうか。結構きつくなってきた。

最初は住民も「部屋がはなやかになったわあ。」とか「あら、うちもジグソーパズル飾ろうかしら。」とか言ってくれていたけれど、最近はどう空気のような。ほこりも少しかぶってきている。五列目の三番目という役にもうんざりしてきた。だれも見えていないし、僕くらい抜けても絵に支障は無いだろう。ここにいでもしんどいだけだ。楽になりたい。

僕は軽い気持ちで、ジグソーパズルから抜け、飛び降りた。

「えっ！五列目の三番目!!」

「どうしたのいきなり!？」

あちこちのピースから悲鳴があがった。着地して絵の方を振り向いた僕は啞然とした。絵を客観的に見たのは初めてだった。想像よりもずっと大きく、色鮮やかで美しかった。そこに灰色の穴がひとつ。五列目の三番目だ。背景だからいなくても支障はないと思いついでいたその場所は、誰がどう見ても絵に支障をきたしていた。

そして次の瞬間、僕は自分が起こした出来事の深刻さに気がついた。五列目の二番目や四列目の三番目がとなりの僕の支えが無くなったために、体を支えきれずに落ちてきてしまったのだ。そうなるのはかのピース達も支えられなくなったり、一人落ちないように耐えるのがバカらしくなってきたりして、ポロポロとパズルがくずれ始めた。

五列目の二番目が僕に近づいてきて言った。

「どうして飛び降りちゃったの!?!みんな頑張っていたのに。」

僕は言葉を失ってしまった。数分前の自分はこうなることを、自分とびありた後どうなってしまうのかを考えただろうか。そして、しんどいのが自分だけではないことを考えたことがあっただろうか。情けなく、自分が恥ずかしくて涙がでてきた。

「僕一人いなくなっても関係ないと思ったんだ。」

嗚咽を混じらせながら言葉を絞り出した。その時、ほかの三百九十八のピースたちが僕と五列目の二番目の元に向けよってきた。

「何言ってるの。僕たちは四百でやっと一個に完成するんじゃないか。」

「そうよ。甘えてんじゃないわよばーか。」

仲間たちの言葉一つ一つが温かかった。さつきとは違う味の涙が出てきた。

しばらくして、涙が止まったころ大家さんが来た。

「あらまあ、バラバラになってるじゃないか。暇つぶしにまた、組み立てようかね。」

また新しくほこりもとってもらえて、僕たちは組み立てなおされることになった。やっぱり組み立てられる順番は角と縁からだっただけで、今回は何とも思わなかった。むしろ、最後にあの灰色の穴をうめられると思うと、うれしくて仕方がなかった。

ついに残り二つのピース。僕と五列目の二番目だ。五列目の二番目が、「今度落ちたら、その背景のきれいな青色、ペンで黒くぬりつぶしてやるんだから。」

とおどしてきた。まあ、冗談だろうけど。おどされなくたってもう落ちないよ。だって、みんなも頑張ってるんだから。